

「井真成墓誌」の拓本

この資料は、2004年4月に中国陝西省西安市内の工事現場から発見され、現在、西北大学付属博物館で所蔵されている「井真成墓誌」の墓誌の「蓋」と「身」の拓本です。

身の上部は発見時にショベルカーによって破壊されており、銘文の3行目から11行目において最初の一文字分が欠けています。

墓誌とは、一般的に石板や金属板に死者の経歴などを記述して墓中に埋められるもので、「井真成墓誌」は石製ですが、展示品の拓本の「身」の銘文の2行目には「姓井字真成國号日本」とあり、日本の国の「井真成」という人の事跡が記されています。

「井真成」については異説もありますが、唐の開元21年（733、天平5年）、第10次の遣唐使節の准判官として唐に渡った人とされ、銘文には渡って間もない開元22年（734）に亡くなり、「贈尚衣奉御（従五品上）」の官を授与されたとあります。

また、「井真成」の読み方は未詳で、「セイシンセイ」「みシンセイ」「みまなり」「みのまなり」などの諸説があります。「井」は中国名とも考えられており、日本名については「葛井《ふじみ》」「井上《みのへ》」などの説が出ています。

ポイントは、その時代の実物として西暦734年に作られた墓誌に「國号日本」と刻まれていることです。国号としての「日本」が記された例としては、1992年に台湾で発見したとされる先天二年（713）の「徐州刺史杜嗣先墓誌」の銘文のメモ、2010年に発見された儀鳳三年（678）の「大唐故右威衛將軍上柱國祢公墓誌」の拓本がありますが、どちらも墓誌自体は行方不明とされています。

今回の展示資料は拓本ですが、「井真成墓誌」には墓誌自体の実物が現存しています。そこで、国号の「日本」と記されたものとしては最古の石文の例として学術的な価値が認められているわけです。もちろん、あくまでも現在のところ最古であるということで、今後、新たな発見があるかもしれません。

「井真成墓誌」は発見後、日本でも公開され、この拓本は2005年7月に東京国立博物館で開催された『遣唐使と唐の美術』展の会場において入手したものです。

展示期間：令和3年5月26日(水)～6月9日(水)

展示場所：鶴見大学図書館1階デジタルサイネージ裏